令和７年度　山口大学教職大学院ニューズレター

学　燈

Gakutou Vol. 29

山口大学教職大学院設置10周年　実践研究推進大会

令和7年8月10日（日）に開催された本大会は、以下のような日程で実施されました。全体会の後に学校経営コース、教育実践開発コース、特別支援教育コースの各コースに分かれて分科会を実施し、それぞれのコースでテーマをもって協議しました。

１３：００～１３：２０　開会行事

・挨拶　　山口大学　教授　中田　充
　　教授　佐々木　司

・事務連絡

１３：３０～１４：３０　分科会

・報告　学校経営コース（１番教室）
　　教育実践開発コース（２６番教室）
　　特別支援教育コース（１５番教室）

・各コースでの協議

１４：４０～１５：４０　３コース合同全体会

・分科会協議報告　学校経営コース
　　教育実践開発コース
　　特別支援教育コース

・３コース混合協議「教職大学院　私たちの現在地」

１５：４０～１５：５０　閉会行事

・挨拶　　山口大学　教授　重松　宏武

【分科会　～学校経営コース～】

まず現役院生から「今」の学びが報告されました。

学校経営コースの学びは、理論と実践を往還しながら深められていきます。原籍校をフィールドとして、自校の現状を SWOT 分析で捉え、関係者とともに戦略を描き、実際に動かしてみる―その過程で、学校マネジメント力やリーダーシップが、少しずつ自分の中に根付いていくことを実感します。院生だよりなどを通して大学院での学びを現場に返す取組も、「学んで終わりにしない」姿勢の表れです。学校経営や教育行政を担う人材を育てるというコースの理念は、こうした日々の実践の中で、確かに形になっています。

現役院生　報告
（石津院生）

教頭職院生　報告
（長岡院生）

続いて、教頭職として派遣されている院生からの報告がありました。市全体の課題解決を見据えた自主研修会の実施や、「探究的な学びを語る会（はぎたん　Cafe）」の取組は、学校の枠を超えて人と人をつなぐ実践です。教頭職派遣が始まって 3 年目を迎えた今も、「どのような形が理想なのか」を問い続けながら実践が続けられています。学び続ける姿勢そのものが学校経営を支えていることが伝わってきました。

大学教員からは、学校経営コース 10 年の歩みが紹介されました。PDCA を基盤とした 2 年間のカリキュラムの中で、理論と実践を往還しながらリーダーを育成してきた一方で、修了後の学びをどう継続していくか、修了院生と現役院生のつながりをどう深めていくかといった課題も共有されました。分科会の協議では、「学びを一過性にしないこと」「縦につながる学び合いの場をどうつくるか」が、これからの大切な視点として確認されました。

分科会では、修了院生と現役院生が、学校経営をテーマに学び合うことの意義についても共有されました。修了後の実践を振り返りながら語られる経験と、現役院生の問いが交差する場は、実践研究をさらに深めていくために欠かせないものであることが確認されました。また、教職大学院での学びを一過性のものとせず、修了後も継続・発展させていくこと、いわば「学びの連続性」をどう支えていくかが、今後の重要な視点として示されました。

協議グループの様子

【まとめ】

分科会の最後に示されたキーワードは、「憧れ」でした。修了院生と現役院生が学校経営をテーマに学び合い、修了後も学びをつなぎ続けていこうとする姿そのものが、次に続く誰かの憧れとなっていきます。学びが一過性のものではなく、時間を越えて受け継がれていくことで、実践研究はさらに深まり、学校経営コースの学びは次の世代へと引き継がれていくのだと感じました。

【分科会　～教育実践開発コース～】

10 周年記念行事ー実践コース分科会まとめ

教育実践コースは【私たちは、どのように“自分らしさ”を活かしながら、他者と共に学び、理想と現実のギャップを乗り越え、歩み続けられるのか】という問いを出発点としました。この問いを出発点とした理由は、私たちが教職大学院での学びや日々の教育実践を通じて、何度も立ち止まり、考えてきたテーマであるためです。このテーマを問いとして集団で共有し、語り合う場を設けるために本分科会は設置されました。

分科会では、先述の問いを以下の4つの観点に分割し、現役院生・修了院生・大学教員が混在したグループで協議を行い、全体会では分科会での気付きを元に安藤院生が発表を行いました。

現役院生　報告
（安藤院生）

【1. 学びを深める中で”自分らしさ”を失わず発揮し続けるにはどんな視点や工夫があるだろう?】

このテーマについては、他者と関わる中で、時には迷いながら自分の“軸”を丁寧に持ち直していくことが、自分らしさを発揮し続けることにつながるのではないかという結論を得ました。

【2. 経験年数や校種、見方・考え方等の違いを乗り越えてチームになるため自分たちにできることは?】

このテーマにおいては、違いはそもそも乗り越えなければならないものかと、問いの吟味を行いました。結論として違いは乗り越えなければいけないものではなく、あって良いものであり、互いにどう学び合うか、子どもに対して一人ひとりがどのように向き合うかが重要であるという結論を得ました。

【3. 理想と現実のギャップを乗り越えていくために必要なこととは?】

このテーマでは、理想を一方的に押し付けるのではなく、周りの先生方を頼りつつ自分の思いを伝えることが重要であり、その行動によって結果的に理想が少しずつ実現に近づくのではないかという結論を得ました。

【4. 教職大学院の学びを経て、「これからの私たち」はどんな実践者でありたいだろうか?】

このテーマでは、教職大学院という帰ってこられる場所があることを大切にし、これまで積み重ねてきた技術や知識の多さだけではなく、学び続けることや他者とのつながりを大事にしていく実践者でありたいという結論を得ました。

【総括】

「自分らしさ」という言葉に対して、これまでは何かしっかりした“軸”を持っていなければならないと考えていました。しかし、本分科会を通して、「自分らしさとは、問い続ける姿勢の中でにじみ出てくるものなのかもしれない」と捉えるようになりました。“問いを持ち続け模索し続ける”ということが、教師としての大きな力になるのだと、今、少しずつ実感しはじめています。本分科会で得た示唆をもとに、一つひとつの迷いや経験を、実践へとつなげていき、自分らしさを模索し続けながらこれからも歩みつづける所存です。

【分科会　～特別支援教育コース～】

特別支援教育コース分科会では、「これまでの 10 年と、これからの 10 年」をテーマに、特別支援教育コースの歩みを振り返るとともに、これからの在り方について語り合いました。

当日は、修了生の先輩方や、これまで院生の学びを支えてこられたご退官の先生方にもご参加いただきました。久しぶりの再会に笑顔が広がる場面もあり、会場は終始あたたかな雰囲気に包まれていました。現職院生とストレートマスターの院生が共に学ぶという本コースの特色をそのまま映すように、立場や経験の異なる参加者同士が自然に言葉を交わし合う姿が印象的でした。

協議内容について、事前に修了生の皆様へアンケートをお願いし、その結果をもとに、次の 3 点についてグループ協議を行いました。

① 大学院での学びの中で印象に残っていること

回答では、応用行動分析やポジティブ行動支援、社会的妥当性や QOL（生活の質）といった専門的な学びが多く挙げられました。理論を学ぶだけでなく、実習を通して子どもたちの姿と結びつけながら考え続けた経験が、強く心に残っていることが伝わってきました。

また、「毎週の実習」や「キャリア教育・地域連携教育」といった大学院全体での学びにも触れられ、仲間と共に悩み、考え、支え合いながら積み重ねてきた時間の重みが感じられました。

② 学びが現在どのように役立っているか

教育現場では、「生徒の行動問題への対応」や「教職員・保護者へのコンサルテーション」、「トークンエコノミーやセルフモニタリングの活用」など、大学院での学びが日々の実践に生きていることが語られました。

単に技法として用いるのではなく、「子どものよりよい生活を支える」という視点を持ち続けていることが、多くの発言から感じられました。さらに、キャリア教育や地域連携を通して地域とのつながりを広げたり、校内での提案やチームづくりに生かしたりと、学びが学校全体へと広がっている様子も共有されました。

③ 現役院生への励ましの言葉やアドバイス

「大学院に来て本当によかった」「今の学びは必ず将来の力になる」「悩む時間も含めて大切にしてほしい」といった温かな言葉が多く寄せられました。

実習に向けては、「優れた実践を見たときには、何がすごいのかを具体的に考えてみてほしい」「専門性が求められる立場になることを意識しつつ、学び続ける姿勢と謙虚さを忘れないでほしい」といった、先輩ならではの実感のこもった助言もありました。

【まとめ】

分科会では、修了生、大学教員、ご退官の先生方、現役院生が混合のグループに分かれ、率直な思いを語り合いました。世代を越えて交わされた言葉の一つひとつから、このコースが大切にしてきた価値や、人と人とのつながりの深さがあらためて感じられました。これまでの 10 年を確かめ合うと同時に、これからの 10 年への希望を分かち合う時間となりました。本分科会での対話が、今後の歩みを支える力となることを願っています。

教職大学院が紡ぐ これからの山口県教育

本年度、本教職大学院では「3コース協働」を強く意識した取組を進めてきました。その出発点となったのが、4月当初に実施されたオリエンテーションです。ここでは、各コースの教育内容や研究テーマの共有にとどまらず、院生同士が互いの関心や問題意識に触れ合う機会を設けました。その後も、毎週木曜日に実施されたランチミーティングをはじめとして、日常的に交流する場を継続的に設けるようにし、日頃のささいな出来事で談笑したり、情報交換したりするなど、異なる立場や世代からの意見交換が行われました。とりわけ、現職教員院生と学部新卒院生との対話は、それぞれに新たな視点をもたらし、理論と実践を往還する学びをより一層深める契機となったと感じています。

また、コースを越えた協働は、単なる交流にとどまらず、課題解決に向けた実践的な学びへと発展しています。各院生が抱える教育課題に対し、多角的な視点からアプローチすることで、従来では見出し得なかった解決の糸口が生まれました。特に特別支援教育コースの院生の視点や経験は、これからの学校教育を考えていく上で大いに学びになることがありました。このような多様な視点の獲得は学校現場における実践力の育成につながっていくものだと考えます。

さらに、上述した研究推進大会においては、多くの修了院生と関わる機会を得ました。そこで印象的であったのは、修了院生が山口県内の様々な地域で勤務し、それぞれの立場から教育実践に携わっている姿です。その広がりを実感するとともに、自身が今後勤務する現場においても、教職大学院で学んだ先輩方と出会い、協働する可能性があることに気付かされました。今後、教職大学院の修了生がさらに増えていくことで、在籍した時期や所属コースの違いを越え、「教職大学院で学んだ」という共通基盤のもとに、緩やかでありながらも確かなつながりが形成されていくことが期待されます。そのつながりは、個々の学校を越え、地域全体の教育力の向上に寄与するものであり、山口県全体の教育を支える大きな力となり得るでしょう。

10周年という節目を迎えた本教職大学院において学ぶ中で、これまでの歩みを振り返るとともに、今後の在り方について考える機会となりました。今回のようなコース間の連携・協働を通して得られた学びは、今後の教員としての実践においても大きな意味をもつものだと感じています。これからの10年に向けては、こうした取組をさらに発展させるとともに、修了院生とのネットワークを基盤とした「世代を超えた学び」を一層広げていくことが重要であると実感しています。日常的な対話と協働、そして修了院生とのつながりの積み重ねが、次の10年を形づくる礎となっていくのではないかと感じています。多様な背景をもつ院生と修了院生が互いに学び合いながら、新たな教育の価値を創造していく――そのような営みが、これからの山口県教育に広がっていくことを願っています。

創立10周年　あなたの学校・職場・ご家族・お知り合いに…もっと

知ってほしい！山大教職大学院

①山口大学教職大学院ニューズレター“学燈”をぜひご周知ください。
【バックナンバー】は、こちらの二次元コード、または「山大学燈」で検索を。

②山口大学教職大学院ではオンデマンド説明会を実施しています。
職場や研修会に大学院生が出向き、教職大学院について説明させていただきます。お気軽にご相談ください。
【申し込みはこちら】 https://forms.gle/MiCxumP5S3Qpmyqh9